



TOYOTA GAZOO Racing GR86/BRZ Cup 2025

Round 1 AUTOPOLIS

堤選手が予選最速！激戦の決勝で2位表彰台

堤がコースレコード更新！中山4位、久保6位とRW007勢が上位に名を連ねた激戦のオートポリス。

TOYOTA GAZOO Racing GR86/BRZ Cup 2025の開幕戦が、4月6日に大分県のオートポリスで開催されました。

予選決勝を1日で行うワンデイ開催となった今大会は、午前中の予選でPOTENZA RW007を装着する#7 堤優威選手（POTENZA）が2分05秒919のコースレコードでポールポジションを獲得。今シーズンからグリップ力とウォームアップ性能がさらに向上したPOTENZA RE-10Dのポテンシャルを、RW007の高剛性を活かした走りでも最大限に引き出し、ただひとり5秒台に突入する圧巻のタイムをマークしました。

このほか、#18 中山雄一選手（POTENZA）が4番グリッド、#121 蒲生尚弥選手（POTENZA）が8番グリッド、#87 久保凜太郎選手（POTENZA）が9番グリッドをそれぞれ獲得。RW007ユーザーが予選上位に名を連ねました。

10周で争われた決勝では、後半勝負のセットアップで臨んだ堤選手が、オープニングラップでポジションをひとつ落としながらも、終盤には驚異的なラップタイムで白熱のトップ争いを演じ、2位表彰台を獲得。中山選手は4位、久保選手は6位でフィニッシュ。多くのドライバーがRW007の高剛性を武器に、最後まで熱いバトルを繰り広げました。

#7 堤優威選手「RE-10Dのグリップ、そしてRW007の後押し — 戦えるパッケージになってきた」



スタートは、自分では大きなミスをしたつもりはなかったのですが、菅波選手のスタートが抜群に良くて……。僕ももう少し内圧を上げていれば、サイド・バイ・サイドで迎えた最初の100Rでも、もっと粘れたはずなので、そのあたりは悔しいですね。最後の2周は、最終コーナー手前で近づきすぎて一度離れてしまいました。「どこで仕掛けようかな」と迷いながら周回数を数えて、最終ラップで仕掛けられるような距離感をつくっていったのですが、あと一歩が届きませんでしたね。

それでも、POTENZA RW007のトラクションの良さと、RE-10Dのグリップによって、一発の速さもしっかりと出せるようになってきましたし、昨年に比べてポジティブな内容が多いです。

次のもてぎでも、予選でしっかりと前に出て、今回より少し高めの内圧を狙えばポジションを守れると思います。

切り替えて、ミスなく戦えるよう準備していきたいと思います。ありがとうございました。

堤優威（つみ・ゆうい） / 1995年9月9日生まれ・神奈川県出身。チームT by Two CABANA Racingより、#7 CABANA BS GR86にて参戦。カートから四輪に転向後、ツーリングカーを中心に活躍。2018年には86/BRZレースで初優勝を飾って注目を集め、2021年からはSUPER GTにもフル参戦。ブリヂストンタイヤの開発も担う実力派ドライバー

RW007 開発ドライバー 佐々木選手「RE-10Dを受け止める剛性。RW007が引き出すグリップの真価」



POTENZA RW007は、開発当初「少しオーバーキャパかもしれない」と感じるほど、高剛性を追求して設計しました。ですが、今シーズンにアップデートされたRE-10Dのようなハイグリップタイヤに対しても、しっかりと受け止められる剛性を備えており、開発の狙い通りに仕上がったという手応えを感じています。RE-10Dのグリップ向上に対してホイール側の剛性が負けていないという感触もあり、その点は非常に満足しています。また、RW007はホイール自体のたわみが小さいため、タイヤのたわみをより明確にコントロールできる点も大きな特徴です。内圧のセッティングがしやすく、繊細な調整によってタイヤの“おいしいところ”を引き出せるホイールに仕上がっています。そうした性能を活かすためにも、細かな合わせ込みを意識して使っていただくと、このホイールのポテンシャルをより感じてもらえるはずです。

佐々木雅弘（ささき・まさひろ） / 1975年7月15日生まれ・岩手県出身。OTG MOTOR SPORTSより、#34 小倉クラッチ BS OTG GR86にて参戦。ツーリングカー一筋でキャリアを重ね、GR86/BRZ Cupではプロシリーズ王者の座にも就いた経験豊富なドライバー。POTENZAタイヤとホイールの開発にも関わり、長年ブリヂストンとともに勝利を追い続けている。